第５４回滋賀県立美術館協議会　概要

１．開催日時：令和6年3月２1日（木）１０：３０～１２：３０

２．開催場所：滋賀県庁　合同庁舎7F　７－A会議室

３．出席者

滋賀県立美術館協議会１４名中１２名参加

蔵屋会長、前崎副会長、石川委員、神田委員、木ノ下委員、西藤委員、菅谷委員、馬場委員、原委員、光島委員、宮本委員、山本委員

事務局

保坂ディレクター（館長）、木村副館長、山田学芸課長、大橋総務課長、
辻滋賀県文化芸術振興課美の魅力発信推進室長、他学芸員７名

４．会議次第

・あいさつ　滋賀県立美術館　保坂ディレクター

・議題

（1）報告事項

①　令和５年度の事業実施状況について

②　滋賀県立美術館魅力向上ビジョンについて

（2）協議事項

①令和６年度の主な事業予定について

５．概要

（1）報告事項

①令和5年度事業実施状況について

（事務局説明）

（会長）

ただいまの事務局からのご説明について、ご質問等があればお願いします。ご発言の際は必ず挙手または挙手マークとお名前をお願いします。

私から一つ伺ってよろしいですか。対話鑑賞のスタートというのがありましたが、美術館関係者以外は馴染みがないかもしれないので補足をお願いできますでしょうか。

（事務局）

資料4、令和6年度の主な事業についての9ページのところに解説があるのですが、養成を受けたファシリテーターがリードするという形で、来場者に作品の前に実際に立っていただいて自由に作品から気づいたこと気になったことを話していただく。作品を解説するのではなくて、ファシリテーターのもと、鑑賞者が自由に発言をしていく。最終的にいろんな気付きをまとめた形で作品を見る、一種の集合知として鑑賞していくというものになります。東京国立近代美術館ではもう２０年近く実施されておりまして、単に新しいタイプの鑑賞方式ということだけではなく、ビジネスパーソンに実際に体験いただいて社員研修の形で使っていただくなど、様々な形での活用の期待、注目されております。当館では、ボランティアの数ですとか、来場者数というところに鑑みまして、毎週土曜と日曜日の各日２回ずつ、午前１回午後１回で各30分という短いバージョンにはなりますが、まずはこうした形で進めていきたいと考えております。

（会長）

今年度はそのデビューのための研修をまずされているということですね。

（委員）
　質問ではないですが、２ページ目の観覧者数の数で７万人から５万人とすごく減った感じがするので、今年は３か月短かったので、それに鑑みて単純計算したら６万７千人ぐらいだったはずなので、そのことが伝わるような資料になったら良かったと感じました。

（委員）
　2ページの運営状況の下のアンケート結果で、一番下に居住地で県内、県外とありますが、県外というのはどの辺りから来られているか大体の感触でも教えていただけたらお願いします。

（事務局）
　今、具体的な数値を持ち合わせていないのですが、アンケートの結果を見ますと、やはり京都、大阪が多くなっています。新名神高速道路が開通した影響もあるかと思うのですが、中部圏も10%くらい来ていただいております。ですので、広域的に関西一円、あとは中部圏から来ていただいているのが中心です。

（事務局）
　追加しますと、これは年度で数値を出していますけれども、展覧会ごとにアンケートを取っていて、展覧会によっては県内と県外の割合が逆転するという現象も出てきております。川内倫子の展覧会などは大阪の人が非常に多く来ていたという数値も出ております。

（委員）
　年代はどれぐらいの層が来られているのか、リニューアル時に割と若い世代とかファミリー層とか仰っていましたので、もしそういったものがありましたら、ご教示くださいますようお願いします。

（事務局）
　こちらも企画展によってかなり差がございます。今年度実施しました「小倉遊亀と日本美術院の画家たち」ですと大体60代以上の方が全体の6割以上を占めて若年層は少ないですが、「みかたの多い美術館展」ですと50代以下の方が6割7割ぐらいを占めると思います。企画展のテーマによって差がありますが、全体でみると、先ほど説明にありましたとおり、中学生以下の割合は増えてきているという傾向にあります。

（委員）
　22ページのサポーター制度ですが、サポーターで企業さんが5-6社あって個人の方が7名ということなのですが、積極的にどうやって増やそうとされているのか。「やります」って言われたら「お願いします」なのか。結構額が大きいので、ここを増やしたらもっと増えそうな気がするのですが、ちょっと数が少ないなという感じがするので、どういう風に進めておられるのかというのが気になりました。

（事務局）
　サポーター制度は今年度の実績が136万円で、現状で申しますと、企業へ呼び掛けたりという積極的なアプローチができておらず、個人に関しても制度の周知が不十分で、手を挙げていただいた方にお願いしている状況です。来年度以降、こちらの収入を確保していくため、制度の改善や積極的な働きかけを図ってまいりたいと考えております。

（事務局）
　当初の予算額に対して、136万っていうのは28.3%、相当低い状況にあります。木の家専門店　谷口工務店さんが、昨年度までは次世代育成のサポーターの100万円にも入っていただいていたのですが、次世代サポーターのほうは今年度はやめられることになりました。一方で、継続いただいているフリーサンデーのほうは谷口工務店さんの名前がよく出るものですから費用対効果を考えていただけるわけですが、次世代育成については、広くお名前を広めていくことにならず、そうしたことが一つ課題であるかと思います。一方で、美術館運営のサスティナビリティ等々を考えますと、サポーター制度とは別の形で寄付を集めていく必要もあると考えております。具体的には企業版ふるさと納税を活用していくことで、来年度以降で主に展覧会の事業費の方を念頭に寄付金を集め

ていきたいと考えております。そちらの方が額を多く集めることができるのと、場合によっては基金を作ってプールしていくことができる等々、別の形でのメリット、方法というのもありますので、検討していきたいと思います。

（会長）
　滋賀県美さんの谷口工務店フリーサンデーは、全国の美術館も非常に画期的な試みとして注目しているところですので継続するといいなと思っております。それから今お話に出ました、この企業版ふるさと納税といって、地元企業ですけれども東京等に本社を置いている企業が、ふるさと納税の仕組みを使って大きな額の寄付をするという仕組み、これも全国の美術館や企業さんで今注目されている仕組みです。これを滋賀県美さんが精力的に取り入れられると大変すばらしいのはないかと思ってお聞きしました。

②滋賀県立美術館魅力向上ビジョンについて

（事務局説明）

（会長）
　部会長の菅谷委員から何か補足がありましたら、先に伺っておきたいと思います。

（委員）
　私が中心になって他の委員と一緒にこれをまとめさせていただきました。基本的には、考え方をビジョンということで整理させていただいたという段階で、改めて整備計画で具体性を持たせるというように聞いておりますので、ここでは現状分析に則った形で、今ある段階からどういうことを目標にしていったらいいのかということの問題を整理させていただきました。

（委員）
　このビジョンの中でコレクションを生かした展開ということで、美術館の大きな役割と重要なテーマだと思うんですが、アール・ブリュットが国内外を見ても有数のコレクションになって大変豊かなことと思う一方で、それ以外の現代美術を中心としたコレクションが多くあったけれど、これは例年と比較してどうなのかということが一点と、もちろん入場者数も重要ですけれども、寄贈ということは金額的に言えば、寄付に相当するような一つの財産であるので、そういった評価指標、あるいはアピールの仕方があるのかなと思いました。これは意見です。質問は、そもそも戦後のアメリカと近代日本美術を中心とした現代美術っていうのをこのまま続けていかれるのか、昨今のバブル以降、欧米ならまだ分かるのですがアメリカに特化するのが少し気になるというのと、アール・ブリュットのコレクションとの対比で考えると、例えばアジア圏であったりとか、そういったことの比較っていう、そのコレクションの件が気になりますので、よろしくお願いします。

（事務局）
　今のご指摘でお答えしますと、資料1の8ページ、9ページ以降で寄贈作品を具体的に紹介しております。そこに評価額を書かせていただいております。評価額までは書かない美術館もあるかと思うのですが、第三者にせっかくつけていただいたので、あえて付けさせていただきました。今年度は、日本画・郷土美術は評価額にして481万円、現代美術については8,230万円、アール・ブリュットについては8,840万円で、現代美術、アール・ブリュットについては非常に大きな金額相当の作品をご寄贈いただいております。現代美術のご寄贈のうち、6,000万相当を牧さんからご寄贈をいただきました。牧さんは昨今、美術館界の話題をさらっている、バッファローの代表取締役社長の方です。そのやり取りの中で改めて感じているのは、もしアメリカ美術というコレクションポリシーがないと、こちらとして何を必要としていますっていうのが言いづらいんですね。範囲が莫大すぎて作品が膨大になるわけですから。うちとしてはアメリカ美術をこれまで収集してきました、その上でここが足りないので、そこのウイークポイントを強化していくことで、他館との差別化を図りたいと改めて言えるなと感じております。文化庁の会議でも、コレクションポリシーをきちんと作っていくことが重要であると言われている中で、いささか限定しすぎの感はありますが、やはり重要だろうと。今改めてアメリカ美術の面白さというものを私自身

も体験しておりまして、よくも悪くも当館は「アメリカ」というふうに漠然と言ってきたわけですね。「アメリカ」というのは中南米、北米、中米、南米もあり、おそらく現実的に考えると北米中心という形になると思うので、カナダも含めて考えていくとか。その中で当然いろんなethnicityの問題もありますし、ジェンダーの問題もあって、そうしたところを補充していくと、それなりにユニークなコレクションになるではないかと考えております。

（会長）
補足いたしますと、今、アメリカ戦後美術というのが出てきたんですが、戦後の美術界にとってアメリカの戦後美術というのが世界の一つの標準になっており、これのバリエーションとして世界中に様々な現代美術が生まれてきたという考え方を取っておりました。昨今はそういう考え方を変えて、アメリカ美術をもっと批判的に見て、他の地域、日本を含めるアジアやアフリカや中東や他の地域の美術が、世界を席巻しているという状態になっております。ただ、例えば滋賀県美さんが持っていらっしゃるマーク・ロスコですね、もう何年も前ですが、初期の作品で100億の落札価格を記録しましたので、滋賀県美さんが持っているような典型作は今150億から200億程度の評価額と考えられております。こうしたものをもう日本は買う財産力がありませんので、それらがバブル期に購入されて滋賀県美さんにあるということは、今となっては大変貴重なことになっていると思います。そうしたものを中心に肉付けをして21世紀のコレクションを豊かにしていきたいという、そういうご趣旨というふうに承りました。

（委員）
色々と何かできそうだなという話は見えてきたのですが、また次年度の予算をこれからお話されると思いますが、やっぱりプランだけじゃなくて、特に人件費と言いますか人の配置とか、何かするっていう時にそれなりにチームを組んでやらないといけないと思うんです。おそらく今でもこの美術館の運営をしていく中で学芸の方はいっぱいいっぱいでされていると思うので、次にグレードアップしていく時に、今の人員ではちょっと難しいんじゃないかなと思いますが、その辺りのお考えをお伺いしたいなと思います。

（事務局）
その辺りについては、まさに来年度以降の整備基本計画の中で、必要な機能、それに対して必要な面積、そしてそれに対して必要な人員を検討していくことになります。言い替えますと、人員が増えることが確定しているからこの計画をしていくのではなく、合わせて検討していくという回答になります。一方で、県全体、日本全体の中で人口が減っていますし、人口が減ると当然税収も基本的には減っていく中で、人員を増やすということは簡単ではないと考えております。なので、人員を増やすことは必要であると考えているのですが、こちらの希望に対して理解をいただけるような、ある意味新しい事業をしていくことが必要であろうと。その一つが、子どもを中心とした来場者をモデルに美術館を作っていくことであり、もう一つは対話鑑賞などの様々な鑑賞のツールを用いて、社会的処方という考え方があるんですけれども、県民、市民の皆さんの孤独、孤立解消、あるいはその健康の増進にいかに美術館が寄与できるかというところを積極的に謳っていく必要があるだろうと。そうしたアピールを通じて何とか人員の確保に努めたいと思っております。

（会長）
対話鑑賞の話を先ほどお出ししたんですが、関西圏で恒常的に行われるのは滋賀県美さんが初めてというふうに伺ったような気がするんですが、それは合っていますか。

（事務局）
単発でやっているところはありますが恒常的にやっているところが美術館ではないので、そうしたこともあり、関西経済連合会さんにもご興味を持っていただいて、今何かできないかという話を進めているところです。

（会長）
そうした先駆的な試み、関西圏でも注目の試みを積み重ねて人件費を獲得していきたいというお話でした。

（委員）
　ビジョンの中で、来やすいようなアクセスのことが取り上げられていますが、過去のこの会でも「アクセスが悪い」ということを言われていましたけれども、ビジョンの中で、アクセスについてはどういう展望があるんでしょうか。

（事務局）
　ご指摘いただいたとおりアクセスが大きな課題と認識しておりまして、まず第一歩目として、公園に来てからも案内表示が不十分で分かりにくい、また表示そのものが少ないという課題もあり、来年度から案内表示の改善に着手してまいりたいと思います。長期的なことを申しますと、現状、入り口が山側、お客様に来ていただく方向に背を向けて美術館が建っているという状況にありますが、これを例えば表側のほうからも入れるようにして、駐車場、あるいはバス停からの距離を短縮するとか、そういったことも含めて改善を図っていきたいと考えています。重要な交通手段となっているバスの利便性の改善、これは主体がバス会社になりますのでお願いということにはなりますが、そういったところも検討していきたいと思っております。

（委員）
　私も銀行に勤めておりますので、経済的な、経済界からの立場でお願いと言いますか、ご意見申し上げたいと思います。魅力向上ビジョンの右下の期待される効果の二つ目に、「滋賀県の認知度の向上に寄与するとともに、経済、観光面への波及効果をもたらします」という文言があったと思うんですが、ある企業さんが2023年に全国都道府県の認知度調査をされまして、面白かったのは、住んでおられる県民の方・居住者と、住んでおられない非居住者などと分けて調査をされて、居住者、いわゆる滋賀県民の方は全国２位で、滋賀県は住みやすいし、交通の便もいいし、そして環境もいいし、子育てもしやすいという報告がありました。ところが非居住者、外から見てですね、例えば滋賀県に行きたいかとか、観光に行きたいかとか、何か滋賀県の魅力を知っていますかとか、そういう調査をしたところ、全国で34位。居住者と非居住者の差が一番大きかった。いかに滋賀県が魅力発信をできてないか。これは別に美術館さんだけじゃなくて、県とか、我々経済界も含めて大きな責任を感じています。来年は滋賀県で国スポが開催される、そして関西万博も開催される、ある意味非常にチャンスがある。今はNHKの大河ドラマが「光る君へ」で紫式部が主人公で、石山寺とか大津界隈で盛り上がりが少しあるんですが、なかなか魅力発信が弱い。昔からそう言われてるんですけども。従って、来年、国スポとか障スポとかで全国から来ていただける方が少し足を伸ばして県立美術館に行ってみたいとか他の施設に行ってみたいとかで、何か事前に魅力発信していただけるとよいと思います。いろんな施設から発信していただかないといけないのですが、県立美術館さんからもいろんな発信をして、ここをターゲットにして、少しでも来場者を増やしていけば、経済・観光面への波及効果も上がっていくのではないか、ということをぜひともご検討をお願いしたいということを私の意見とさせていただきます。

（会長）
　実は今日、琵琶湖ホテルに泊まらせていただいたんですが、なんと素晴らしいホテルかと思いまして、驚嘆いたしまして、京都市内の高いビジネスホテルに泊まるぐらいだったら、30分くらいで来られるこちらに泊まった方がもう完全にいいと思って、朝出かけてまいりました。他にも拝見しますと、31ページの安土城考古博物館リニューアル、琵琶湖文化館リニューアル、希望ヶ丘公園リニューアルと、県のほうでたくさんの事業を組まれていて、その中で、美術館さんもプレイヤーとして発信をされていかれるということかと思います。逆に、こうしたことは経済界からのサポートがないとできないので、美術館さんからもお願いをする立場ということになりましょうか。ちょっと差し出がましいことを申しましたが。

（委員）
　ホームページのことで感じていることがあって要望みたいになるんですが、発言させていただきます。オンライン美術館に音声を使ってパソコンとかスクリーンリーダーとかを使ってアクセスするんですが、アクセスできないんです。それと、美術館ニュースの申し込みをすると、これも拒否されてしまって認証エラーになってしまいます。それで情報保障はどうなっているんだろうと。お願いしたところ、何日か前に確認したら、ニュースの方は登録できるようになり、これはよかったなと思います。オンライン美術館の方はパソコンでいろいろ裏技を駆使してやっとトークのところまではいけて、保坂さんの声が聞こえてきたんですけど、４回目だけでそれ以外

のところはいけませんでした。目次の部分は読み上げるんですがその中に入ることができなくて、画像だけだったら仕方ないですけど、多分音声を含めたデータがあると思うんですがそこに入ることができないんですね。他の美術館でもそういう傾向がありまして、イベントの案内とかははちゃんと読み上げてくれるんですけれども、YouTubeとかに繋がるようなところが入れない。この辺がうまくいけると楽しめるんで、今後考えて欲しいなというところです。情報保障のことで言うと、今回の膨大な資料も工夫して読みやすくしたものを事前に送付いただいて、それはすごく助かっているんですけど、最近、見えない人もパソコンだけじゃなくてWindowsや、スマホ、特にiPhoneとか増えてきていろいろ試すんですけど、僕の使い方が悪いのか、iPhoneでのアクセスも、どうもオンライン美術館のとこになると拒否されてしまうので、課題として考えていってほしいなと思います。

（事務局）
　オンライン美術館は美術館のホームページの中でもちょっと特殊な構造をとっております。単純に言うと、最近のおしゃれなホームページにありがちなんですが、ブラウザの中で、上下のスクロールで動くのではなく、自分でカーソルを上下左右、斜め方向にも動かして探していくようなページの作りになっています。リストになっていなくて、全体を探すためには、晴眼者でもいろいろ探してみないといけないんです。ウェブデザイナーから提案があってこれを採用したんですけども、光島さんに言っていただいたように、人によってはカーソルを動かして探すのは難しいし、機能によっては読み上げすら難しい、動画に達することができないというご意見をちょうだいして、まさに今反省をしているところです。その辺りは、今後の改善の課題として考えていきたいと思います。

（委員）
　私は滋賀県美術協会の理事長ということでここに名前を挙げていますが、もう一つ滋賀県書道協会の方も理事長をしておりまして、元々はそれでこの協議会に出ていた人間です。今日コピーを持って来たら良かったんですが、昨日、朝日新聞の滋賀版で、滋賀の書写・書道教育がすごく変わっていると、大きく記事を取り上げていただきました。結構マスコミの取材がいっぱいありまして、多分、毎日新聞の東京版でも先月同じようなものを掲載していただいています。去年はテレビの秘密のケンミンSHOWで取り上げられて、すごく反響が大きくて、僕らのほうが驚きました。全国的にユニークな教育をしているわけですね。それが生涯学習に繋がって、大人の方もちょっと他県とは違うような、かなり現代的な表現が多いっていうのが滋賀の特徴で、それを知事もご存じで、賛同してくださって、私のところの書展に作品を出していただいています。結構そういうふうに繋がっているんですけど、美術館とはどうしても繋がらない。二つ原因があって、書道のコレクションが極めて少なく、明治期までのものに限られているのです。全国的に美術館はそういう傾向があって、京都の国立近代美術館には井上有一がありますが、本当にそれは稀な例で少ない。アール・ブリュットについてはすごいコレクションができたのですが、子どもの作品は全然別物で、展示されることがないわけですね。先日、保坂ディレクターに「僕らは子どもの書はアール・ブリュットだと思っていますが何で入らないんですか」っていう素朴な質問をしたら、「そこまで入れると、とてもじゃないけど限界を超えるから、子どもの作品は扱わないということになっているんです」と教えていただきまして、なるほどなと思ったんですけど、結局、美術館とはそういうことなんですね。ここからは毎度の話になりますが、そこを繋ぐ接点になるのは僕はギャラリーだと思っているんです。美術館が公開承認施設になっている限り、中のギャラリーは絶対分けなくちゃいけないので、分ける形でぜひ別館でギャラリーを、もっとキャパの大きい物を作っていただいて、そこで滋賀でいろんな活動をしている人をどんどん受け入れていって、そういう人たちが美術館にも足を運ぶという流れをつくっていただきたいと切に要望します。子どもも大人も来たくなる美術館、一番手っ取り早いのはギャラリー作ることと僕は思っています。先月、滋賀県書き初め展がありました。三日間で7,800人来ています。有料の展覧会ですけど、一点400円の出品料を払って、それで18,000点以上が集まっています。そういうすごいエネルギーを滋賀は持っているので、それを繋げていけるのが僕はギャラリーだと思っています。これは書道だけではなくて、他の分野でもいっぱいあるので、それが美術館に繋げられる場としてギャラリーを位置づけていただけるといいのではないかと思っています。もう一つだけ。僕は県外の人たちを集めるときは、とんがった企画をしないと無理だと思うと当初から申し上げて、それを実現してくださって、県外の人も来るようになっているとお聞きして、それは喜んでおります。でも、県立美術館である限り県内の人も足を運んでほしいんですね。そうすると、もう一つ大事なことは、やっぱりバランスだと思っています。僕の周りで美術関係の人が言っているのは、今の県立美術館は現代アートとアール・ブリュットに特化し過ぎているのではないかなと。県内の作家っていうと小倉遊亀であったり今森さんであったり、わ

ざわざ県立美術館が取り上げなくてもスーパーメジャーな人が取り上げられて、もうちょっと普通の人たち、そこまでメジャーじゃない人で現代アートには属さない作家もいっぱいいますから、そういう人たちも取り上げていってほしい。それもやっぱりギャラリーが入り口になると思っています。その中で美術館の学芸員さんがご覧になって、「これは」という企画が出てくるんじゃないかなと。以上二点、要望になってしまいますけど、申し上げておきたいと思います。

（2）協議事項

①令和6年度の主な事業予定について

（事務局説明）

（委員）

私はビジョンを作る委員会を担当しておりましたので、そちらのほうでいくつかご意見いただいて、もっともなこと、あるいは我々も感じていること等ありました。事務局のほうでまとめられているので、私のほうから特に一つずつは言いませんが、現状分析で、我々も滋賀県という土地・地域、今まで魅力が十分に発揮されていないのはどうしてかということから始まり、そこは今日いくつかご指摘いただきましたことと共通していると思います。これを実現するには、今後整備基本計画の策定の段階にいくわけですが、概要の3のアクションプランの6番に、県庁各部局や周辺の教育、医療福祉機関、企業、市町村をはじめとする各機関との連携の強化ということがありますが、このビジョンを作った委員会の考え方としては、滋賀県立美術館ががんばってくださいっていうだけでは新たな魅力を発信することはなかなか難しいのではないか、従来のあり方とは違う形で、いろんな関係者と、あるいは県の部局を横断する形、それから周辺の公園、図書館、それから大学、作家さんも含め周辺にいる人たちあるいは関係している人たちと一緒に、単に文書を作るのではなく、体制なり組織を作っていっていただきたいということがビジョン作成の委員会の発想でした。あれもこれもというのはあるのですけど、すごく可能性があるということは作成した委員の共通の意識でしたので、それが発揮できるような基本計画を作っていただきたいと思っております。

（事務局）

このビジョンを策定、公開するにあたっては、隣におります美の魅力発信推進室の辻が中心になって、全庁内に照会をかけておいて意見もちょうだいしていますし、議会のほうにも見てもらって、様々な意見を反映したうえで今回のこの取りまとめとなっております。また、この整備基本計画を作っていくにあたって、来年度以降、部会のメンバーであった東北大学の小野田先生に主に建築計画の観点から機能等々についてケーススタディをしていただく予定でありますし、同じく立命館大学の阿部先生には市民の方々とのワークショップで改めて何が必要とされているのかの認知調査をお願いしようとしております。あと部会のメンバーの文化庁の関谷さんから、彼は北海道大学の博士課程の研究者でもあるのですが、研究の中でミュージアム価値を向上させるマネジメントモデル仮説を、参加型社会的インパクト評価の手法を活用して検討しましょうとおっしゃっていただいています。美術館に関わるステークホルダー、美術館だけではなく、県庁の人を含めて何人かでディスカッションをやっていこうという申し出をいただいておりまして、菅谷さんがおっしゃっていた、いろんな人との結び付きをどう反映させていくかということについては、そこでできていくのではないかと思っております。

（委員）

全体として来館者の数が増えたり中学生以下の割合が増えたりというのは、いろんな工夫をしてくださった結果かなと強く感じました。ビジョンを聞かせていただいても、コンセプトの最初のところに子どもたちが美術館・アートに出会うということを書いてくださっていて、滋賀県に暮らす子どもたちがもっともっと、アートに触れる機会が増えていくと楽しみだなと思いました。今後の検討ポイントの、事前に予約しなくても体験できる教育プログラムというのは、すごく魅力的だなと思いました。長浜に住んでいるので、なかなか、朝の早い指定された時間までに到着するのが難しいというのがあるので、気軽な気持ちで、今日じゃあ美術館行ってみようかって言った時に、何か体験できるものがあるっていうのは、すごく素敵だなと思いました。情報発信のところで、湖北に住んでいて、美術館から送っていただく情報以外から収集することが難しいなと思っています。情報

発信をいろんなツールに対して実施してくださっているのはよくわかるんですけど、子育て世代とか、特に北部、米原・長浜・高島という北部のところに届いている情報発信ツールがちょっと少ないかなと思いました。令和6年から、北部振興に大きく進んでいかれると思いますので、北部にどうやって情報を届けていくのかを今後ご検討いただけるとすごく嬉しいなと思いましたし、県立大学さんと連携していた事業については、やっぱり北部で結構いろんなツールでSNSとかでも上がってくるなっていうのがありました。情報発信ツールを使うだけじゃなくて、いかに北部の団体さんとか市町さん含めて関係性を強くして一緒に連携してやっていけるかっていうところも一つポイントになるかなと思いました。

（事務局）
　今年度は休館もあって、湖北の三市でトークをさせていただきましたが、今後どうするか検討しようと考えております。引き続き、どうぞよろしくお願いいたします。

（事務局説明）

（委員）
　やはり美術館といいますと安定した常設展と攻めの企画展というのが一番重要になってくると思うんですけども、人が集う環境といたしましては、他の事例で言いますと、陶芸の森で春と秋にアートマーケットが行われるのですが、普段、陶芸館にしても産業展示館にしてもガラガラなんですが、アートマーケットの期間は駐車場どころか307号の国道もあふれそうな人となっています。京都で言うと、文化博物館で大学と連携しながらアートマーケットを秋にされております。他には芦屋の美術館でも「つくるば」でやっておられます。美術館がものすごく場所的に恵まれているのが、ロビーとか玄関周りに広いスペースがあるということと、去年私ども造形集団でポップアップギャラリーで小品展を開催して作品に触れながら作家と話をしながら購入することができるということをやりましたら、狭い空間でも一定の効果がありましたので、美術館主導で大きなスペースでやれば、かなり人の集う環境になるのではないかと考えております。いろいろやっておられる作家の方もおられると思いますので、手作り市ではなくて質の高い美術品を、作家と話しながら触りながら購入することもできるということで、経済的な活動でもありますので、人の集う環境というのを一つお考えいただけたらどうかなと。新しい発想ではなく、いろんな地域でやっておられることではありますけども、一つの方向性としてどうでしょうかということで、提案させていただきます。

（委員）
　この魅力向上ビジョンの17ページを読みながら気づいたのですが、あくまでも私の場合ですが、いつも子連れで来るときは、滋賀県美直行なもので、「わんぱく広場って何だ？」と思いました。そこで今、びわこ文化公園のサイトを調べてみたら、こんなものが作られているということに今更気づいたのです。正直、びわこ文化公園は広すぎて、子どもを連れて全部回ろうという気にはならず、時間がある時で、しかも天気がいい時じゃないと公園内は回れません。そして、わたしのようなタイプだと、滋賀県美に行きたいなと思ったら、そこしか行かない、見ない、ということに気づきました。
　さらに、びわ湖文化公園のサイトを見てみると、滋賀県美のことが全く何も書いていません。InstagramやFacebookもやっておられますが、おそらく滋賀県美でこういうことをやっているという案内も載ってないのではないでしょうか。双方で周知したほうがいいのではないのかと思いました。例えば、双方のページを見ても何も情報が書いていないので、子連れが「滋賀県美以外にどこに行こうかな」「わざわざ滋賀県美まで来たのに何も無かった」と思われたり、もしくは「わんぱく広場か図書館以外にどこに行こうかな」と思っても、滋賀県美ではなく、めんたいパークに行ってしまうかもしれません。
　それと、今年度に公園内におしゃれなカフェがオープンされたのも、県内の人間ですけど知りませんでした。調べてみたら軽食もあったので、今度来たら行ってみようかなと思いました。これも滋賀県美のホームページには書かれていないようです。館内のカフェで食べてほしいという気持ちもあるでしょうが、子連れで食べようと思うと、上の二階でも食べられるものの、メニュー的にも少し辛いところがあるので、近場に食べられる場所を選択できるのはありがたいです。
　保坂さんが館長になられてから、学芸員の名前をチラシなどに載せてくれるようになって、学芸員を身近に感じ、さらに学芸員という職種を知ることができる機会が増えている気がするので、すごくいいことだと思ってい

ます。あまり表に出ない職種ですから知ってもらうことはとても重要です。それならば、もっと親しみやすく知ってもらうために、美術館の近くでごはんをどこで食べるのか、遊ぶところはどこがあるのかという情報を「学芸員のおすすめ」みたいな形でホームページに載せるのも手だと思いました。

さらに、メンバーズの人数が少ないのは私も気になっていまして、兵庫県立美術館とか金沢21世紀美術館などは、メンバーになると近隣の施設で、割引価格でごはんが食べられて、駅から美術館まで遠いことを逆手に、道中の近隣施設で割引が使えたりもするのですが、滋賀県美にもメンバー用のマップや割引施設を作ることはできると思いますし、メンバーズの新たな獲得にもつながるのではないでしょうか。

あと、次の展覧会を見ると、支払いは現金のみと書いてありますが、現金以外にクレジット決済等、幅広く決済方法を入れていただけるとありがたいです。

（事務局）

決済方法については、美術館だけではなくて、全庁的に対応するということで、来年度を目途に使えるようになる予定ですのでご期待ください。あと、公園内のカフェ等の施設を美術館の来館者に向けてどう発信していくかですが、当館の中島がメンバーズの方をいろいろやってくれていて、メンバーズ向けのニュースレターにはそういうページがあったので、改めてそうした記事をホームページ等々でも展開していきたいと思います。そして、ご指摘いただいた公園のホームページですが、今気づいたんですが、滋賀県美のリンクが昔の滋賀近美のリンクになっていてリンク切れになっておりますので、早急に修正を求めていきたいと思っております。その他、来年度から展覧会を京都新聞さんと共催することになりました。年間通じて共催の形を取っていくことで、様々な形で展覧会を京都新聞さんにご紹介していただくことになっておりますので、改めてどうぞよろしくお願いいたします。また、企画展の「志村ふくみ展」と、常設の小倉遊亀コーナーについては写真撮影が可、SNSも展開していって構わないということになりました。青森県立美術館の棟方志功もSNSやっていいよっていう形で積極的な展開をしているんですけども、当館のほうも小倉家、そして志村さんのご理解を得て、展開していきたいと思っております。あと、しばしば話題になる持続的な運営についてですが、来年度は担当ががんばってくれまして、「滋賀の家展」では朝日新聞の財団さんから、そして「BUTSUDORI展」では担当者が鹿島の財団と、大日本印刷の財団さんから、それぞれ助成をいただくことができました。内容やその活動が評価されての助成と考えておりますので、今後もがんばっていきたいと思っております。ビジョンのほうも今までいろんなご意見をいただいておりまして、例えば光島さんのほうからは、野外彫刻を作るのであればぜひ触れる作品を考えてほしいとおっしゃっていただいていますので、来年度以降の計画の中でそうした作品を前提に選定・検討を進めていきたいと思っております。あと、西藤委員からいただいておりました夜間開館については、来年度、試行の形で実施をしてニーズを把握していきながら、今後どのような形をしていくのがいいのかを検討していきたいと思っております。

（委員）

対話鑑賞に関して、関西でずっとやっているところがないっていうのを聞いて、そうだったなと思いました。僕は美術館に持ち込みの形で、見えない人と一緒に対話鑑賞みたいなものをやってきているのですけれど、対話鑑賞っていうのは見えない人に馴染みやすい鑑賞方法だと思っています。突然、見えない人が一人やってきても、その人を含めて対話鑑賞プログラムをすることができると思いますので、そこはファシリテーターの工夫で、見えない人・見えにくい人も対象にすることを意識的にやっていただければ、見えない人がアクセスがしやすい状態になっていくと思うので、よろしくお願いします。

（事務局）

まさに今年、当館エデュケーターの吉川が試行的にファシリテーション・対話鑑賞をやっていくなかで、目が見えない方がいらして参加されるということがあって、説明の必要がいろいろ出てきて盛り上がったという報告も受けておりますので、いろんな方、どんな方がいらしても対話鑑賞が成立するように、ファシリテートの方法をきちんとやっていきたいと思います。ご意見ありがとうございます。

（会長）

すぐできる小さな工夫から大きな工夫まで、あるいは美術館のみでなんとかなることから、全県的に、県庁さんのみならず財界の方のお力もお借りして動かさなければならない案件まで、また入場料収入アップのみならず、助成やご寄付を使った持続可能な経営まで、様々なご意見をいただいたと思います。まだまだお話されたい

方がたくさんいらっしゃったのではないかと思いますが、時間もございますので、こちらでマイクを事務局にお返ししたいと思います。

（事務局）
　時間を超過いたしまして、すみません。今後はコンパクトにしていきたいと思います。委員の皆さまには、長時間にわたって熱心にご審議いただくとともに、議事の円滑な進行に協力いただきまして、ありがとうございました。まだまだ言い足りないことがありましたら、お時間を取って恐縮ですが何らかの形で我々のほうにお伝えいただければと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。本日はどうもありがとうございました。

≪協議会終了後にいただいた意見≫

【委員から】
　まずは私が質問した人員補充とその予算についての件です。
　保坂ディレクターがおっしゃったように、学芸や美術の専門性からではなく場所づくりや福祉、社会的処方などの観点を含むことで、多方向へ説明可能な予算化を目指していくといった考え方には納得いたしました。うまく聞き取りができなかったので、発言の意図を取り間違えていたら申し訳ありません。そのうえで、「何をするか」だけでなく「どのようなプロセスですすめるか」が重要だという考えは「魅力向上ビジョン」の内容から感じ取りました。だからこそ様々な機関や主体との対話や連携を掲げているのだと思います。私の質問は人員補充という点での予算についての「量」的な内容で終わっていたのですが、上記観点を伺うにつれて、様々なステークホルダーと対話し、動かし、進めていく、さらに居場所づくりとアートについて、今日的な視点を持ったかなりハイブリッドな人材が必要になるという「質」の点についての検討も大切だと気づきました。その点すでにご議論をされているかとは思いますが、念の為お伝えしておきます。一分野の専門家では難しいのでは、という想像です。
　あとこれは些細なことなのですが、「滋賀県立美術館魅力向上ビジョン」という名称についてです。
公的な事業の名称としてあるべき姿なのかもしれませんし、その先にまた新たなプロジェクトがあるのかもしれませんが、関わる人達を増やすという意味で、ワクワクして人が関わりたい、と思わせるような名称が必要なんじゃないか、とちょっと感じました。そのうえで、そのワクワクするような今後美術館がより魅力的になっていく活動に、県下唯一の芸術大学である本学も本来ならもっと積極的に関わるべきかと思っております。美術館も関わる学生もワクワクできるような取り組みができるのなら、またとない挑戦になりますので、ぜひ何かしらの連携についても可能性を探って、美術館のこれからについてお手伝いできたらと勝手に思っております。その際はお気軽にご相談ください。

【委員から】
1. 子供も大人も来たくなる美術館というのはすばらしいです。中学生以下の来館者が増えているのもきちんとした成果です。「子供」とはっきりすれば、独自のやり方も見えてきますし、今の社会の流れからも受け入れられやすいでしょう。公園との連携もやりやすくなるし、学校関係者も来やすくなります。そうなると、子連れの期待感が高まるので、展示も含めた館全体として常時子供が楽しめるものになるにはどうするか、ということが気になりました。
2. 公園の駐車場から美術館が遠いというのが問題なら、公園全体を美術館という理解にして、公園の駐車場であり美術館の駐車場であるとなれば、車を停めた時にはすでに美術館の中にいるとなって気持ち的に遠

くなくなるのではないかと。MIHO MUSEUMは駐車場からすさまじく遠いですが、全部がミュージアムだから文句はでないですよね（カートで送迎もありますが）。会議中に話題になっていた、駐車場から美術館へのルートが分かりにくいという話で、標識の数を増やすということでした。それなら公園内に美術館への最短ルートがわかるような彫刻作品をたくさん設置して（全部の作品が美術館の方向を向いているとか）、公園の美術館化をするというのはどうでしょう。有名作品である必要はないので、それこそ県内のアーティストさんたちに協力を仰ぐとか。不要になった銅像とかあちこちからもらってくるとか。あとは書の作品がないという話だったので、書家の方々にご協力いただいてめっちゃかっこいい標識作るとか。道に文字書いてもらうとか。一番いいのは公園全体で考えることかと思いますが、Park PFIがどうなるのかわかんないですし、まあ公園内の関係者全体で動くのはプレイヤーが多くてなかなか難しそうなので、美術館が率先してさりげなく公園にはみ出していったらおもしろくなりそうに見えました。この作品はどこにある？的なスタンプラリーとかもできそうだったり。アートマーケットみたいなのと連携もできそうです。
3. 子どもと言っても、作品の収集とは別なので、作品収集はこれまで通り進めていかれたら良いかと思います。今は寄贈したい人が多いので、どうやったら寄贈や寄託ができるか、どんな作家の作品を受け入れているかという情報はHPにあったほうがいいかと思います。普通に考えたらアメリカの近現代美術を滋賀県立美術館が欲しいと思っているということはわからないです。たくさん連絡があると対応が大変なのはわかりますが、買わないで作品を集めるためですし、すごいものも見つかりそうです。

【委員から】
　協議会以後、【SMoA NEWS】を何度か受けとっています。テキストデータで読み上げてくれるので、とても参考になります。美術館の動きがよくわかっていい感じです。視覚に障害のある人にとっては、このようなメールでの案内が送られて来るのがずいぶん助かりますね。
　もう１つ参考にしていただければと思い、二つのウェブサイトを貼りつけておきます。いずれもスクリーンリーダで読みやすいページということでご覧いただければと思います。

東京都現代美術館｜MUSEUM OF CONTEMPORARY ART TOKYO
https://www.mot-art-museum.jp/

東京都渋谷公園通りギャラリー
https://inclusion-art.jp/